

2018年2月クルディスタン報告書

日本クルド友好協会



南クルディスタン(イラク北部クルディスタン地域)



・シーア民兵がISの復活を助長

イラク中央政府並びにイランの傭兵であるシーア民兵とクルディスタン地域の争いに乗じた、ISの復活というシナリオが現実味を帯びてきつつある。先月31日、[イラク治安部隊アンワル・アッダヌウク准将](#)がISに暗殺されるという事件が起きた[1日、イラクニュース]。3日、[キルクーク市のクルド人地区で17歳の少女が刺殺体となって発見](#)された[4日、バスニュース]。イランが支援するシーア民兵集団によるキルクークの治安は悪化し、殺人、強盗、誘拐が日常茶飯事となっている。ゴラン(変化運動)の幹部によれば、シーア民兵の占領により急速な治安悪化に直面したキルクーク市民は、[クルド人部隊ペシュメルガの帰還を待ち望んでいる](#)という[14日、バスニュース]。14日、[モスルで人民動員軍が警察と小競り合い](#)になるという事態も発生した[14日、イラクニュース]。人民動員軍はイラクの法によって合法的な準軍事組織と認められているが、その実態はフセイン政権崩壊後に各地で結成された私兵部隊の寄せ集めであり、軍隊としての規律ではなくそれぞれの指導者への忠誠によって成り立っている。それゆえ占領地における住民虐殺、略奪に手を染めていると批判されており、治安維持能力は低いと言わざるを得ない。6日、アメリカ政府は、[イランの支援を受ける民兵勢力「人民動員軍」によるアメリカ軍部隊への攻撃の脅迫を一蹴](#)した[7日、クルディスタン24]。人民動員軍の一角をなす「バドル軍団」は、「アメリカ軍の駐留はイラクの分裂とテロを誘引する」とし「完全撤退」を要求したが、アメリカ政府は全く考慮する余地がないとした。

・イラク連邦予算策定始まる

予算配分問題は、相変わらずイラク中央政府とクルディスタン地域政府(KRG)との間の主要問題である。中央政府は、クルディスタン地域の取り分が少なくなる 2018 年度予算案を作成している。イラク議会議員ジャブーリは、[中央政府が提示した予算案を「違憲」とであると非難](#)した。



ルダウのインタビューに答えるジャブーリ議員

ジャブーリはスンニ・アラブの議員であるが、イラクで少数派という点でクルド人と利害を共有している。IMF は中央政府に KRG への予算配分を増やすよう勧告しているが、イラク首相アバディは聞き耳を持たない。KRG の政府運営の原資となる石油収入においては進歩もあった。27 日、イラク首相アバディは、[キルクークからの石油輸出について KRG と合意した](#)と発表した[27 日、バスニュース]のである。

・アフリンへの連帯

先月 20 日から続くトルコの北シリア・アフリン侵攻に対し、イラクのクルディスタン地域でも抗議とロジャバ(シリア領西クルディスタン)への連帯が広がっている。7 日、[イラクのクルディスタン地域、北シリア各地のクルド人がアフリンに入域](#)しトルコの侵略行為に反対する抗議運動を行った[7 日、クルディスタン 24]。13 日には、トルコが国家最大の脅威と位置付けるクルディスタン労働者党(PKK)が、[クルディスタン地域北部のザーホーでゲリラ作戦を敢行し 22 人のトルコ兵を殺害したと発表した](#)[14 日、ユーフラテスニュース]。イラクは PKK の本拠地があることから、トルコ軍による空爆や国境侵犯が続いている。

・クルド系メディアの快挙

28日、アラブ首長国連邦のドバイで開催された世界新聞協会の表彰式にて、クルディスタン地域最大のメディアネットワークのルダウがSNS部門の最優秀賞に選ばれた。英字アカウントが100万以上のフォロワーを抱えていることがその理由となった。中東メディアというと日本人にもなじみの深い「アルジャジーラ」や、アルアラビア、「中東」紙といったアラブ系メディアが有名である。ニュースがSNSでシェアされる時代に対応し影響力を持つに至ったルダウは、アラブ系メディアが事実上独占する「中東の声」を多様化し、中東で特に無視されがちなマイノリティの意見の尊重につながる。クルド人のプレゼンスを高めることは言うまでもない。

ロジャバ(西クルディスタン、北シリア)



・トルコ軍傘下の反体制派勢力の残虐行為

北シリアにおいては、トルコによるアフリン侵攻作戦が続いている。トルコは北シリアを統治する民主統一党(PYD)を、PKKのシリア支部とみなし軍事的恫喝を続けてきた。2月は、トルコ軍の傭兵の役割を果たす「自由シリア軍」の残虐行為で幕を開けた。2日、[アフリンにおいて戦死したクルド人女性兵士の遺体をトルコ軍傘下の武装勢力が切断、損壊し侮辱する動画がSNS上にアップされ\(閲覧注意\)](#)多くのクルド人の怒りを招くことになった。このような残虐な行為は、トルコ軍の強力な支援によって不問にされると当事者たちは考えていると思われる。シリア反体制派勢力は、数年前にもシリア・アラブ軍兵士の死体から心臓を取り出し食べる仕草を様子を収めた動画を公開し、物議をかもしたことがあった。



トルコ軍傘下の武装勢力の凶行の犠牲者となった女性兵士バリン・コバニ (出典: AFP)

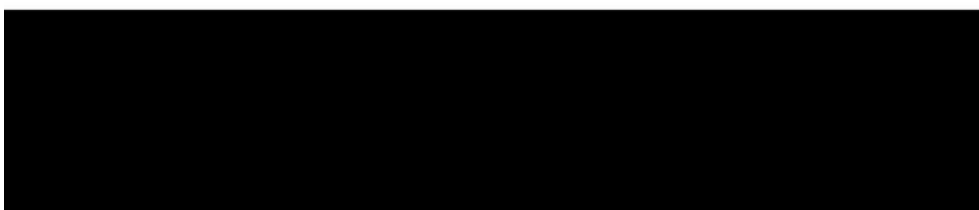
・「自由シリア軍」から「鶏泥棒軍」へ

トルコ軍のアフリン侵攻に参加する民兵が占領した村において、クルド人民家から家禽を奪いその様子を撮影し SNS に投稿するという事件が起きた。



トルコ軍傘下の反体制派民兵が SNS にアップロードした動画のキャプチャ

動画は瞬く間に多くのクルド人にシェアされ、彼らの間に強い怒りを呼んだ。「自由シリア軍」と名乗るトルコ軍傘下の民兵集団を「鶏泥棒」とか「タダの鶏軍」を呼ぶ動きが見られた。女性兵士の死体損壊とあわせて、シリア各地で劣勢のシリア反体制派勢力の道徳性に改めて疑問を投げかけられる結果になった。



クルド人が作成したシリア反体制派の旗印の星を鶏のアイコンに変えたコラ画像

七面鳥は英語でトルコ国名と同じく「ターキー」だが、そのトルコがクルド人の七面鳥略奪を黙認することで、アフリン侵攻の正当性をますます貶めることになった。

・トルコメディアのアフリン報道

トルコの戦況報道に対する疑問も噴出することになった。先月 31 日トルコ国営アナドル通信は、国境付近の要衝ブルブル地区をトルコ側が占領したと発表した。シリア人権監視団の発表によると、その時点で実際は同地区へ到達したのみで衝突が始まったばかりであった。4 日、英 BBC は [トルコ側とクルド側それぞれが発表した損害、敵殺害数](#)について報じた[4 日、BBC]。トルコ軍の補助部隊として行動する反体制派勢力の損害は不明である。クルド系メディアは以前よりトルコ領内の対 PKK 作戦において、トルコ軍の死者が過小に報道されているまたは戦死を事故死と意図的に誤って報じていると批判してきた。エルドアンは作戦の長期化とトルコ軍兵士の犠牲の増加が自身への批判となって跳ね返ってくることを恐れている。

・アメリカの北シリア支援の行方

アメリカは結果としてトルコのアフリン侵攻を許すことになったが、軍部隊が駐留する北シリア各地からは一歩も退かず、トルコ軍のこれ以上の戦線拡大を阻止する意向を継続して見せている。先月 31 日、[アメリカ中央軍ジョセフ・ボテル将軍は、アメリカ軍が引き続きシリア民主軍と協力していくことを発表した](#)[1 月 31 日、在エジプト・アメリカ大使館公式サイト]。5 日、人民防衛隊 (YPG) 報道官シパン・ヘモは汎アラブ「中東」紙の電話取材に対し、[アメリカ軍はトルコ軍のマンビジュ侵攻を断固として許さない方針](#)であることを明らかにした[5 日、アラブニュース]。同日、ワシントンタイムズ紙は、マンビジュにおけるトルコ軍とアメリカ軍の衝突の可能性について報じた。トルコでは現在急速に反米世論が高まりつつあり、それは特にエルドアンの支持層と一致する。アメリカとしては、トルコ軍の侵略的な軍事行動を支持することはないが、NATO 同盟国同士が衝突する事態を避けるため、アメリカ軍が駐留していないアフリン侵攻は事実上黙認するが、マンビジュからユーフラテス東岸から軍を撤収することはないとの立場を明らかにしたことになる。7 日、[アメリカ陸軍ポール・E・ファンク中將はマンビジュを訪問し、IS の完全な壊滅のためにアメリカ軍が同地に留まりクルド人勢力へ支援を続けることが重要だと語った](#)[7 日、ABC ニュース]。28 日、[アメリカ国務省ヘザー・ノーアート報道官は、シリアの停戦にはアフリンも含まれるべきと発言した](#)[29 日、バスニュース]。ウォールストリートジャーナルには、7 日 [シリアのクルド人を支持しエルドアンの暴走を止めるべきといった趣旨のコラムが掲載](#)された[7 日、ウォールストリートジャーナル紙]。

・トルコの侵略行為を周辺各国が警戒

トルコは、今回のアフリン侵攻以前にもイラク連邦政府の許可無しにイラク領内進駐、2016 年 7 月の「ユーフラテスの盾」等々と国際法を無視した軍事行動を続けてきた。また歴史的にも周辺各国へ違法な侵略行為を行ってきた。今回の行動は当然のことながら、周辺地域に警戒心を抱かせた。2016 年のトルコのクーデタ未遂事件関係者引き渡し問題で、トルコとギリシャには火種が存在する。2 日、ギリシャ国防相は、[先月 31 日だけで 138 回もの領空侵犯を犯した](#)と発表した[2 日、RT]。12 日には、[エーゲ海のイミア島においてトルコ警備隊の船舶がギリシャの巡視船に](#)

[体当たりをするという事件](#)も起きた[12日、「毎日」紙]。1日、エルドアン政権寄りのトルコメディアにおいて、[トルコ軍の北シリア侵攻はギリシャに警戒心を生じさせるという趣旨のコラム](#)が掲載された[1日、トルコ「新たな夜明け」紙]。今回のアフリン侵攻を、1974年のキプロス侵攻とアナロジーする言説も散見された。アフリンと同じくトルコの侵略行為の被害者であるキプロス共和国は、[作戦開始の2日後国際法を無視したアフリン侵攻作戦を非難](#)している。エルドアン政権寄りの日刊「朝」紙において、[現在同様アメリカとの関係が危機的状況に陥った例としてキプロス侵攻を論じるコラム](#)が掲載された[15日、「朝」紙]。なぜキプロス侵攻が今回のアフリン侵攻を考える上で重要かといえば、その「戦後処理」が似通ったものになるであろうと考えられるからである。トルコは1974年のキプロス侵攻後、トルコ系住民の多い北部を分離し傀儡国家を樹立させた。[エルドアンはアフリンを占領後シリア難民を流入させることを目論んでいる](#)[16日、「自由」紙]。アフリンからは既に多くのクルド人住民が脱出している。そこにアラブ系シリア難民が流入すれば人口比に変化が生じる。またアフリン地域にはテュルクメン住民を居住する。エルドアンは、シリア難民とテュルクメン住民を背景にアフリンを、占領下にあるシャフバ、ジャラブルスと連結させた傀儡国家にし、あわよくばハタイ県のように併合を狙うだろう。そのトルコの傀儡国家北キプロスは、先月21日[トルコによるアフリン侵攻が開始された1日後直ぐに支持を表明](#)した[1月21日、アナドル通信]。

・アサドからの援軍の意味

アサド政権側勢力が、トルコの侵略行為からシリアを防衛するため、アフリンに入域したことは関係各国を大いに驚かせ様々な憶測を呼んだ。19日、[シリア国营放送は「数時間以内」にアフリンへ政権側部隊が進駐すると発表](#)した[19日、フランス24]。その後アサドがアフリンに送った部隊は、シリア・アラブ軍の補助民兵組織「祖国防衛隊」の戦闘員であることが明らかになった。



アフリンに到着した祖国防衛隊戦闘員達（アサド政権側SNSより）

PYD とアサドの間にアフリンの支配権を譲渡するかわりに政権側部隊がアフリン防衛を行うとの「取引」がなれたとの噂が流れた。クルド側はその疑惑を強く否定したが、どのような合意があったのかは不明であるアサドはシリア・アラブ軍本隊を送ることによるトルコとの全面衝突をさげつつも、義勇軍派遣によるトルコの侵略を阻止する構えを見せる形になった。アサドはトルコのアフリン侵攻を利用し反体制派への攻勢を強めているとの分析もある[8日、エルサレムポスト]。この場合立場は逆である。むしろエルドアンこそ、欧米メディアの注目が東グータへのアサド政権の攻勢に集まっている際に、アフリンへの侵略行為に及んだといえる。アサド政権が、トルコ軍への直接攻撃を行わないのはあくまで戦力の差とロシアへの配慮に過ぎない。ロシアはシリア内戦の政治的解決を主導することで、国内と欧米に力を誇示しようとしている。そのためエルドアンがプーチンに恭順の意を示してからは、ロシアが主導する内戦解決の枠組みにトルコを巻き込んできた。アサドは表面上ロシアの方針に従っているが、本心ではトルコの主権侵害に心底怒りを感じている。トルコはシリア反体制派の最大のスポンサーであり、アサドはトルコをシリアに対する「陰謀」の首謀者と見ている。トルコが過去シリアの政変に乗じてイスケンデルンに兵を進め併合した記憶も古びてはいない。アサドは同じ「シリア国民」であるクルド人勢力を助けることでクルド人にも求心力を高め、ロシアの容認があるとはいえトルコの侵略を許さない姿勢を見せた。今後シリア内戦をさせるにあたり一番重要なことは、北シリアの「シリア・アラブ共和国」への再統合、YPG を中心としたシリア民主軍を祖国防衛隊のようにシリア・アラブ軍に次ぐ合法的な武装集団とすることである。今回の「共闘」は、その地ならしになるのではないだろうか。

・サリフ・ムスリムの逮捕

24日、北シリアを実質的に統治するPYDの共同代表サリフ・ムスリムが、滞在先のプラハでチェコ警察に逮捕された[25日、ワシントンポスト紙]。チェコ警察は翌日25日、「外国人を摘発」とだけ発表した。



Police of the Czech Republic - CMP of the Capital City of Prague

Detention of an alien in the center of Prague

The police detained a person in Interpol.

Prague police detained in the night from Saturday to Sunday, on the basis of the prior consent of a public prosecutor of a 67-year-old foreigner who was in the viewpoint of Turkish Interpol. After the necessary actions, he was placed in a police cell. His international detention was informed of his detention by Ankara's Interpol officials. The Police of the Czech Republic will continue to proceed as required by Act No. 104/2013 Coll., On International Judicial Cooperation in Criminal Matters.

mjr. Mgr. Andrea Zoul - February 25

チェコ警察公式サイトでの発表

トルコ政府の要請があったことが明らかになった。トルコは直ぐにトルコへの身柄引き渡しに向けた手続きをチェコ政府に要請した。しかし 27 日、[チェコ当局はムスリムを解放した](#) [27 日、「自由紙】。結局チェコ政府はトルコの要求に国際的な水準から見て、外国人の身柄拘束と引き渡しを要請するに足る正当な理由があるとは認めなかった。ムスリムは、トルコ軍の侵攻に直面するアフリンへの支持を求めヨーロッパ各地に赴き、各国のメディアでトルコによる侵略行為の不当性を訴えていた。トルコ内務省は、隣国シリアの自治組織の指導者であるムスリム氏を一方向的にテロリストとし、調査対象一覧に加えている。



トルコ内務省公式サイトより

トルコはクルド人反体制派のみならず、ギョレン派對策のためにもヨーロッパ各国に諜報網を広げ、暗殺者を送り込んでいると見られる。トルコが、エルドアン政権に不都合な人々を逮捕、殺害するために、各国の主権を侵害することを厭わないことを世界に示した事件であった。そして、ヨーロッパ諸国はエルドアンの願望を素直に聞き入れるつもりはないことも同時に明らかになった。

文責: 日本クルド友好協会研究員 並木宜史